

平成13年度開発教育指導者研修

北海道国際協力センター

2002.1.10

平成13年度中学校教師海外研修報告(ザンビア派遣)



学校名 旭川市立嵐山中学校

担当教科 英語

氏名 上村 育代

I. JICA中学校教師海外研修(ザンビア)に参加したきっかけ

今回の研修を志望した理由は主に次の2点です。

1. 外国人と触れ合う機会が乏しい地域に、国際理解の芽を育てたい。中学校だけではなく、小学校との一貫性の中で、開発教育を中心とした国際理解学習をしたい。
2. 物にあふれ、何不自由なく暮らしている生徒たちに自分の目で見てきた発展途上国の実情を伝えたい。

なお、開発教育とは、差別や格差、抑圧等のない平和な社会づくりを目指す学習であり、異文化理解から多文化共生へ、積極的平和活動、市民参加の方向性推進などの理念を持っています。最終的には、相互理解を前提とした地球市民としての考え方を根付かせることを目指した教育です。

II. 旭川市立嵐山小中学校の紹介と研究内容

私の勤務する学校は小中併置校です。旭川市内中心部から10キロ強の農村地に位置しています。かつては、全国有数の養豚団地を有していたが、近年は、ごみ処分場建設に伴って、関連産業に従事する家庭も増えています。児童生徒は、小学校が12名、中学校が6名の計18名。家庭や地域の温かい支えにより、素直に明るく育っています。

しかし、少人数であるため、幼い頃から人間関係に変化が乏しく、集団の中で厳しく見つめ合ったり、より良いものを希求したりする精神に欠ける傾向がみられます。また、持っている力を積極的に発揮させることも必要です。

文化的な施設なども校下には大変乏しく、学校がコミュニティの中心となっています。姉妹都市委員会の活動に大変積極的な家庭もあり、短期留学生の受け入れをしてくださったこともあります。基本的には学校に出入りするALTとの関わりが、唯一の「国際理解体験」です。

このような地域にあって、英語教諭が果たすべき役割は大きく、今回のザンビアへの短期派遣も、メディア（北海道新聞、あさひかわ新聞）が積極的に取り上げてくださったこともあり、地域の方々の反応も大きいものでした。

私は、昨年度は小学校の先生方とともに、総合的な学習の時間の試行として、国際理解学習に取り組みました。今年度は、研修部の一員として、小学校の国際理解学習の計画立案に参加し、後期からは小学校の先生方とともに、実際に授業に取り組む予定です。

夏季休業後の校内研修会議では、ザンビアの体験を報告させていただき、校内の先生方に研修の一端をご理解いただきました。

小学校の先生方は、後期からの学習を念頭において、先日行われた文化祭での劇では、国際理解の活動を踏まえた脚本に取り組んで下さり、特にザンビア・韓国に焦点を当てた脚本を作ってくださいました。

また、本校の学校長は大変国際理解教育に造詣が深く、私の活動を支援してくださっています。

文化祭の校内展示では、学校長や教頭が、ザンビアでの学習の一端を地域の方にも紹介してはどうかと発案してくださり、そのご好意で、ささやかながらパネル展示を行いました。多くの地域の方が足を止めて、パネルを見てくださり、感激しました。



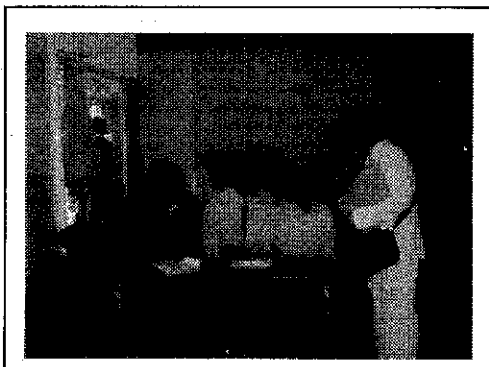
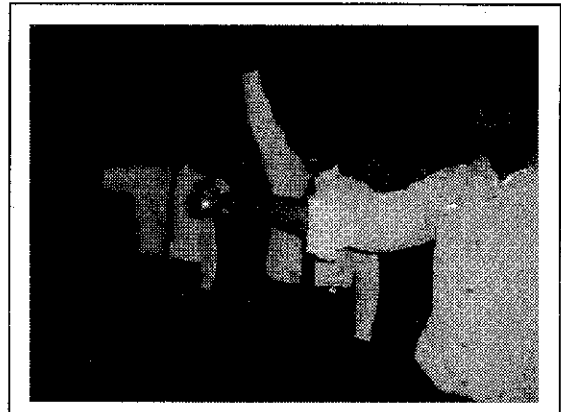
Ⅲ. ザンビア視察の内容報告

ザンビアでは、主に学校現場、HIV感染の温床となっているともいわれる国境地帯、などを視察しました。

1. パークランズハイスクール(8月3日)

首都、ルサカ近郊の中高等学校。わりと裕福な家庭の優秀な子が通っている学校です。本城さんという理科教師が青年海外協力隊員として派遣されています。

教室の窓は割れたまま、3～4人で一つの机や椅子を共同で使う、当然、電気はなく、真っ暗な中での授業 e t c と日本とは比べ物にならない劣悪な状況でした。



あるクラスで日本文化を紹介する模擬授業をしました。最初にご紹介しました生徒に作らせたスクールカレンダーを使って、日本の学校を紹介したり、日本の歌や折り紙、ジャンケンゲーム等を楽しみ、最後には、日本語で一人一人の名前を書いてあげました。

生徒たちの反応は非常によく、授業後も大勢の生徒が日本について質問をしてきたり、ペンパルを求めて住所を書いた紙をよこして来たりと、いつまでも興奮

冷めやらずという感じでした。

生徒たちに学校生活についてインタビューをすると、どの子も喜んで質問に答えてくれました。「どの教科が好きか?」という質問には、教科書を開いて見せて、「この勉強が好き」と目を輝かせて語る姿には感動しました。特に男子は協力隊員が教えている理科が好きな生徒が多く、理科教師が大変不足している中、協力隊員が大変貢献していると感じました。

2. PHC(プライマリーヘルスケア)プロジェクト(8月7日)

コミュニティベースのPHC活動推進の現場を視察しました。劣悪な生活環境や保健医療を改善し、住民による自立可能な基本的医療を確立することを目的としています。

ただ援助を与え続けるのではなく、いかに地元住民のプライドを高揚させ、自立させていくかが課題であるとわかりました。

った。どの施設を訪問しても、各責任者の自信に満ち溢れた表情が印象的でした。

JICAのキャッチフレーズにもある「人づくり」の一端を垣間見ることができました。



3. チルドゥ(8月4日)



人口の1/5がHIV感染者と深刻化するザンビアのHIVの蔓延を何とか食い止めようとするNGO「ワールドビジョン」の啓蒙活動の実態を視察しました。

国境地域でトラック運転手や売春婦を対象にし、売春行為そのものをやめさせるのではなく、予防法や性行動の変容を促すキャンペーンを行うのは賢明な策だと思いました。

ザンビアではテレビ等も普及していないため、情報源がありません。そんな中、国の行く末を考えると、

彼らの啓蒙活動はとても重要な意味を持つと感じました。

4. ザンビア人の温かい心にふれて

村落開発普及員が配属されているカトゥバという貧しい村では、何度も夕食を勧められました。後から協力隊員に聞くと、彼らは自分達が食べるだけでもやっとなのだそうです。こういったことは、カトゥバに限ったことではなく、訪問先で出会ったザンビアの方々は、いつも私たち日本人を温かく迎えてくれました。単なる偶然ではなく、海外青年協力隊員の派遣をはじめとするJICAの支援活動に帰するところが大きいと痛感しました。



IV. アフリカ研修を授業に

～中学校での英語授業での取り組み～

1. カレンダーがアフリカの子ども達との交流のきっかけに

事前に、英語の授業で生徒たちに本校の行事を紹介したスクールカレンダーを作成させ、アフリカの学校へ持っていきました。

帰国後、アフリカの中高校生がスクールカレンダーを見て、心を動かされた様子のビデオを授業で見せました。

目を輝かせながら、「日本の学校で田植えをしているなんて驚きだ!」「日本の卒業式はアフリカとは全然違うんだ。」「雪を初めて見て感動した。」と語る同世代の反応を見る生徒たちの目もまた、真剣でした。

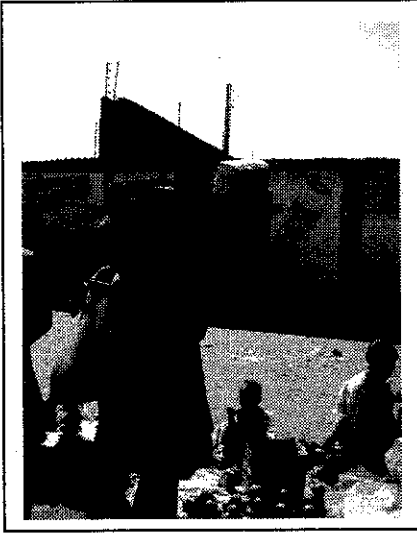
アフリカの子ども達に自分達の英語が通じた喜び、日本の学校に興味を持ってくれた満足感を体感することができたのです。

アフリカの生徒たちからは、是非日本の子どもと文通をしたいとのリクエストもありました。もちろん生徒たちも海外の、それもアフリカの友達ができることに大喜びです。

その時は、英語が唯一の媒介となるので、英語の有用性も肌で感じるすることができます。

2. 撮影してきた写真、ビデオを利用した授業

ア. フォトランゲージの導入



アフリカの写真を見せ、何をしているところか、英語で説明させるという授業を行いました。生徒たちが初めて目にする光景の写真（例：パン売りの少年）等を導入に使うことは、彼らの知的好奇心をくすぐるのに最適です。

また途上国の実情を知ること自分達の暮らしを振り返ったり、一面的な見方を見直す機会としても有効です。

イ. ビデオで生きた教材

ザンビアの中高校生にインタビューをし、英語で答えてもらった映像を、ザンビア英語のアクセントや現地の同世代の子どもたちの考え方に触れるための教材として活用しています。

3. リスニング教材&異文化理解の教材として

訪問したパークランズハイスクールについてのリスニング問題を作成し、授業の導入で使ったところ生徒は大変興味をもって取り組んでいました。資料編に、その授業のワークシートを、掲載します。

特に、6問目の” Why do the windows have no glasses?” という問いに対しては、” Because African students broke them.” と答える生徒も出て来て、日本の学校の現状とのギャップが浮き彫りになりました。

その他、現地の人々が調理の際に木を大量に伐採するので、それを防ぐために、資源活用を目的とした七輪を開発した協力隊員がおり、英語で書かれたそのマニュアルを入手してきたので、それを途上国への支援のあり方を考える授業にしたいと考えています。

V. 小学校での国際理解学習

小集団の中で、社会性の育成を図ることが、本校の課題です。外国人講師を招いて行っている国際理解集会などが、イベント的に終わってしまう状況を乗り越えるために、開発教育のプログラムを有効に機能させることはできないだろうか、と考えています。

学校祭では、小学校の先生が中心となり、劇を国際理解学習の内容を下敷きにした指導にしてくださいましたが、子どもたちに、本当の意味で、朝鮮半島分断の意味や、ザンビアの人々の貧しい状況を認識させることが難しいという反省もありました。

後期はロシアの方をお招きしての集会があるようですが、国と国との関係を学びながら、人と人との理解を深め、子どもたちの意識を広げる工夫が必要であり、開発教育のようなプログラムの必要性を痛感しています。

VI. 地域と手を結びながら

学校祭では、この研修の報告の意味を込めて、撮影してきた写真を基に、パネル展を開き、地域の方にも好評でした。旭川市内とは言え、市中心部とも大変離れて場所があり、各国の人々と関わりを持つ機会の乏しい地域です。

こうした機会を捉えて、地域の方と手を結びながら、教育活動を進めていくことの大切さを改めて感じました。

ザンビア訪問、こぼれんばかりの笑顔の子どもたちにたくさん会った

旭川市風山小中学校の上村英代教師(左)は、国際協力事業団(JICA)の中学教師派遣事業のメンバーとして、八月三日から七日間、アフリカのザンビア共和国を視察してきた。訪れた学校の教室には、電気や人数分の椅子がない。しかし、自分の勉強内容を熱く話したり、人なつこい笑顔を浮かべたりする子どもたちに会い、「物はないけれど、エネルギーで生きる力を感じたと、子どもからパワーを分けてもらうような強烈な印象が残ったという。

上村教師は、中学三年のクラス担任で、英語を担当している。アフリカ行きを希望したのは、給食を残す生徒が多いのがきっかけ。アフリカの学校に行きたくて、行けない子どもも、食事も満足にできない様子を実際に見て、自分の言葉を生徒たちに伝えたいと、デジタルビデオやカメラを持ち、全国から集まった

十四人の先生たちと出発した。一行が訪れたのは、首都・ルサカから車で約一時間の町にある中学と高校が一緒になった学校。制服や教科書を買っただけの経済力がないと、学校には通えず、生徒は中流階級以上に育った子どもが多いと、授業料は無料だといふ、感心したのは、子どもたちの積極性だ。生徒

たちは、上村教師を見かけると、あいさつだけでなく、自分の好きな教科について、こぼれんばかりの笑顔で話してくれました。しかし、街に行くと、学校に行かず、親の露店を手伝ったり、頭にカゴをのせてパンを売り運んでいる子どもたちが大勢いる。そんな子どもたちを聞いても、弁護士「俳優になりたい」という答えが返ってきた。貧しくても夢をなくしてはいない。

ザンビアは、十五から十九歳までのエイズウイルスの感染者が世界で五番目に多い。売春行為が絶えないからだ。隣のジンバブエとの国境の街・チルド



上村さんと生徒たちがジャンケンやおりがみで遊んだ後で、皆、すっかり仲良くなった。生徒が持っている和紙人形は、上村さんがアフリカに行くのを知った旭川市民が、「子どもたちにプレゼントして」と、上村さんに託した手作りの品だ



今まで、アメリカやカナダなど先進国には行ったことがあがるが、発展途上国は初めてという上村さん。ウは、トラックドライバーなどをターゲットにする女性の溜り場だ。ここで、上村教師は彼女たちと話す機会があった。下は十二歳くらいの子もいたという。十七歳の子は、初対面の上村教師に「本当はこんなことはやりたくないが、お金のためだから」と、胸の内を明かした。彼女たちには、選択肢がないことを知ったが、「いつかフリーマーケットを開店したい」という夢があることもわかった。

ザンビアの生活を自分の言葉で伝え、生徒たちが考えるきっかけになれば

●ザンビアの子どもたち(おもに高校生)が日本人たちと文通をしたいと、上村さんに住所をたくさん預けてくれました。文通をしたい方は、風山小中学校の上村さん(73.61-1199)へ。



ザンビア共和国…アフリカ中南部の内陸部に位置している。イギリスの植民地だったが、1964年に独立。銅が最大の輸出品で地下資源が豊富。しかし、農地が少なく、食糧は輸入に頼っている。人口、約920万の多民族国家。日本には、銅を輸入している。

上村教師は、子どもたちの声や、学校、街の様子を二時間テープ二本にまとめ、生徒たちに見せるつもりだ。総合的な学習の時間には、ザンビアのエイズの発症状況を説明した後、性病の予防策を教えたり、水道やトイレがないという生活の違いを伝え、村がどうすれば良くなるのかも、皆で考えていきたいという。上村教師は「お金や食べ物がないからといって、向こうの人は表情がイキイキしていて希望を捨てていない。生徒たちと同年代の子どもたちとこのように状況を知ってもらい、もっと積極性を持ってもらいたい」と、力を込めて話した。

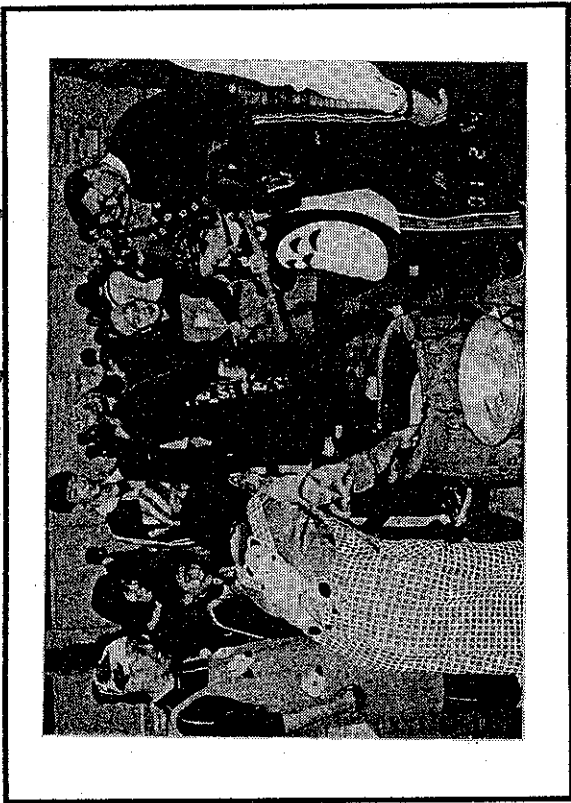


上村さん一行が病院や学校を見て回っていたとき、後ろからずっと着いてきたという子どもたちと「マリエンバエアーニ」(二人)にちはというザンビアの言葉で交流をはかった(カトゥバ)



首都・ルサカ近郊のカトゥバという町で会った家族。道端でお母さん(右後方)が、子どもの服を繕んでいたところを上村さんが撮らせてもらった

December Making mochi gathering



12月 もちつき集会

もちつき集会では、春から皆で育ててきたもち米と小豆を使って地域の人たちと一緒にあんこもちを作ります。あんこもちを作る時には、うすときねという道具を使って作ります。日本では、お正月の1月1日～3日によくおもちを食べます。他にあんこもちだけでなく、きなこもち、ゴマもち、雑煮（スープに入ったもち）などがあります。

Students make mochi with people living in Arashiyama. We use mochirice and adzuki bean grown by us.

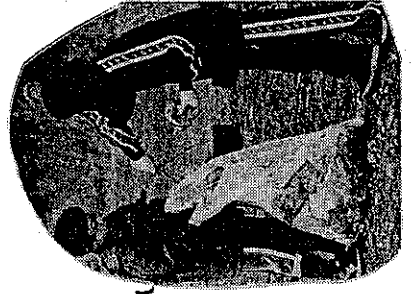


9月 クリーン作戦

嵐山小中学校では、毎年2回ボランティア活動として嵐山をきれいにしています。皆が一生懸命ゴミを拾っても、捨てる人がいるのでいつごろにゴミは減りません。それどころか今年は拾いきれないほどのゴミの量でした。この嵐山がいつかゴミひとつもないきれいな町になるように、これからもきれいにしていきたいです。

September Clean Campaign

At Arashiyama JHS, the volunteer club cleans up Arashiyama twice a year. We will clean up Arashiyama to make Arashiyama no garbages.



Listening Test vol. 1

19
18
/20

Name: XXXXXXXXXX
date: August 21st

~ About African school ~

Q1. Where did Ms. Umara visit?
She visited Parklands high school.

Q2. How many students are there at school?

There are 200 students.

Q3. Is this school the boys' school?

No, it isn't.

Q4. Can students study music?

No, they can't.

Q5. Who teaches science at this school?

Mr. Han does.

Q6. Why do the windows have no glasses?

Because the wind destroyed them.

Q7. How many students sit on one chair?

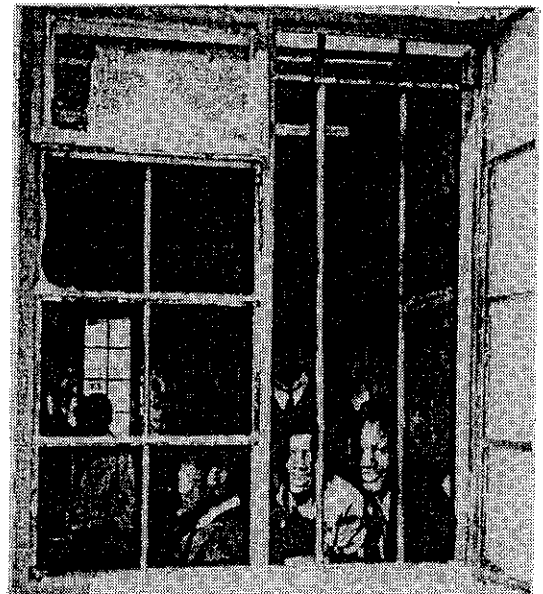
3 students do.

Q8. What do African students think of their school life?

They think enjoy school life.

Q9. What is ^{they} the most popular sport among ^{their} boys?

football is.



《教員自己紹介のための資料》

「出会い」No.35 (1997年)所収

高橋 一 (たかはし はじめ)



研究室:
キリスト教学・
キリスト教NGO論
環境システム講義棟
(内線 4828)
e-mail:
hajime-t@
rakuno.ac.jp
Tel. 011-388-4828

「酪農学園に導かれて」

1) 私はこの4月、約25年ぶりに故郷の北海道に帰ってきた。酪農学園大学・短大に赴任することになったからである。

それまで私は、カンボジアを経て、英国のパーミンガムでキリスト教

2) NGO (非政府組織) のありかたを学んでいた。妻もオクスフォードのホスピス

3) (終末期医療ケア) で研修を受けている最中だった。二人ともようやく一年が経った時期で、これから本格的に今後の学びの方向を定めようかと考えていたとき、思いがけず私が酪農学園からの「job offer」をいただいたわけである。この1月末の出来事であった。即決の返事を求められていた。

私は迷い、思い切っかねて尊敬す

4) 福島恒雄先生 (日本キリスト教団・留萌宮園教会牧師) に英国から Fax と電話でご相談申し上げた。福島先生が酪農学園の戦後間もない時期の卒業生のお一人とうかがっていたからである。福島先生もさぞびっくりされたことと思うが、先生は私のこれまでの歩みをご存じの上で、以下のようなことを言われた。「酪農学園大学・短大の卒業生の中には、青年海外協力隊などで東南アジアやアフリカ、中南米諸国で奉仕している学生が意外に多いのです。キリスト教学を担当するにしても、高橋さんのカンボジアでの経験がきつと今後も生かされるのではないかと思います。」

5) この福島先生の言葉が、最終的に赴任を決心する大きな要因となった。英国から成田を経て、私一人が札幌に向かう飛行機の中でたまたま読んだ朝日新聞で、「NGO 出身者が大学の教員へ」という大きな記事が掲載されていた。これが思いがけず、私が東京やカンボジアでよく知っている知人たちの紹介記事だったことも、今から思うと不思議な符合のように感じられた。

6) 私は札幌の出身で、東京の大学に進学するまで札幌で育った。江別の近くにある豊幌という小さな集落では、かつて祖父母が細々と農業や酪農を営んでいたもので、子どもの頃にはしばしば札幌から出かけて行って稲刈りを手伝わされたものである。しかし、子ども心にもその仕事の厳しさはひしひしと感じることができた。当時の豊幌近辺は「原野」と呼ばれており、冬は乾燥

させた「泥炭」が燃料だった。夕張川の洪水で、老朽化した家屋や納屋が水びたしになった年もあった。冷害で稲穂には小さな青い米粒しか実らない年もあった。当時は普通列車(蒸気機関車に牽引されていた)も多くが「豊幌通過」で、真冬にはその小さな駅から雪道をかきわけて母といっしょに「原野」の祖父母の家まで歩くのがつらく、何度も立いた覚えがある。たまに馬そりで迎えにきてくれたときなどは、うれしくて逆にはしゃいだものだった……。

ところで、自分の人生を考え始めるようになって、私はどうしても北海道から離れた土地で学んでみたいと思うようになった。一つには、北海道の独特な(?)「官立・公立主義」とでも言うべき「権威主義」の風土が我慢できず肌に合わなくなったためであった。もう一つには、当時、ICU (国際基督教大学) で秋学期だけフランスから帰国して教えておられた森有正という哲学の先生のもとで学びたくなり、結局両親を説得して思い切ってICUに進学した。ICUは、当時も今も小さな学校で、しかもリベラル・アーツ(教養学部)の単科大学であった。何が当時の私をICUに魅きつけたのかかわからない。が、私はこの学校でキリスト教に出会い、その後恩師の助手を経て神学校に進み、とうとう牧師になった。10年間東京で牧会し、その後、JOCS (日本キリスト教海外医療協力会) というキリスト教NGO団体からカンボジアに派遣され、開発途上国の諸問題に具体的に出会うきっかけを与えられた。カンボジアから帰ってきて、アジアでNGO活動を続けるためには、英語力を含めて開発途上国の諸問題を歴史的にも実践的にももっと深く学ぶ必要性を痛感し、英国で勉強を続ける決意をしたのであった。9) Developing countries

7) 今、酪農学園大学・短大の校舎の窓から遠く石狩湾と手稲連峰の山々を眺めていると、今までの私の歩みをかえりみて、自分がどうしてこの学園に赴任することになったのか不思議な気がしてならない時がある。その「答え」を、学生諸君や同僚の教員・職員の人たちと共に、少しずつ発見していきたいと思い始めた今日この頃である。

8) 9) Developing countries

(注) 1) 1997年4月(今から4年前) 2) NGO = Non-Governmental Organization 3) Hospice

4) 現在は引退した 5) 5月と10月に学内説明会がある 6) 1997年4月3日朝日新聞の記事

7) 50年前、酪農学園大学はICU農学部とつる子誌(計画)であった。8) 2001年4月7日朝日新聞参照

Ⅲ 研修アンケート結果

平成13年度 開発教育指導者研修 アンケート

1. 開催時期は？

- (1)問題ない (2)別の時期がよい

2. 実施要項が手元に届いた時期について

- (1)締切2週間以上前 (2)締切1週間以上前 (3)締切直前(1週間を切っていた)

3. 実施要項はどのように入手されましたか？

- (1)北海道教育委員会経由学校長から (2)札幌市教育委員会経由学校長から
(3)NRC経由 (4)その他()

3. 実施要項配布時期について

- (1)早い (2)ちょうどよい (3)遅い

4. 応募の動機について

- (1)自ら進んで (2)上司にすすめられて (3)その他()

5. 各プログラムについて

プログラム名	内容はよいと思われましたか？				
	とてもよい	よい	どちらでもない	あまりよくない	悪い
(1日目) 基調講演について					
平成13年度中学校教師海外研修報告について					
参加型学習手法の学習について					
外国人研修員との懇親会について					
(2日目) 参加型学習：グループ内討論について					
参加型学習：全体会議について					
青年海外協力隊のビデオについて					
青年海外協力隊員との意見交換について					
全体総括について					

6. (ア)「貿易ゲーム」に参加しての感想をご記入下さい。

(イ)「宇宙人がやってきた！」に参加しての感想をご記入下さい。

7. 学校の授業、その他の場所で「開発教育」を実施されたことがありますか？

- (ア)はい (イ)いいえ (ウ)国際理解教育を実施した

「(ア)はい」・「(ウ)国際理解教育を実施した」の場合、その内容について簡単にお書き下さい。

8. 今回の研修の内容を学校、その他の場所で活用してみようと思われましたか？

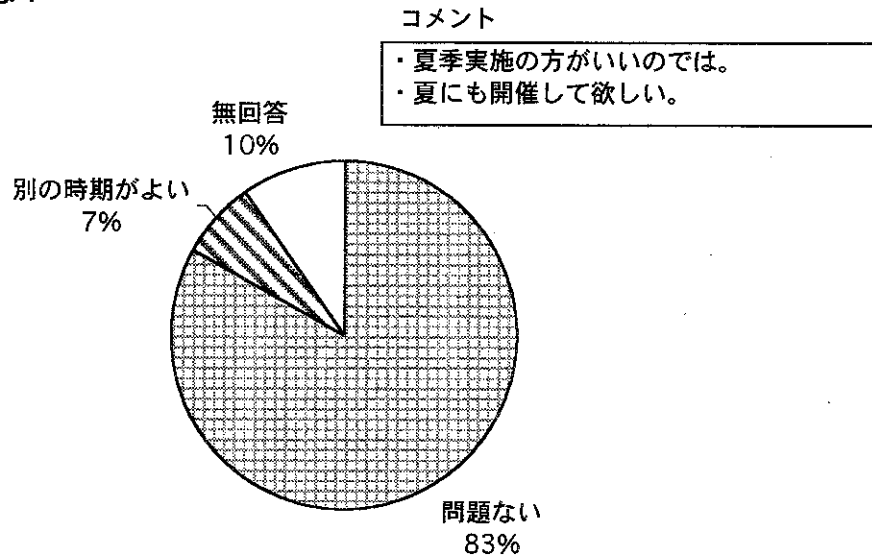
- (ア)はい (イ)いいえ (ウ)その他

理由：

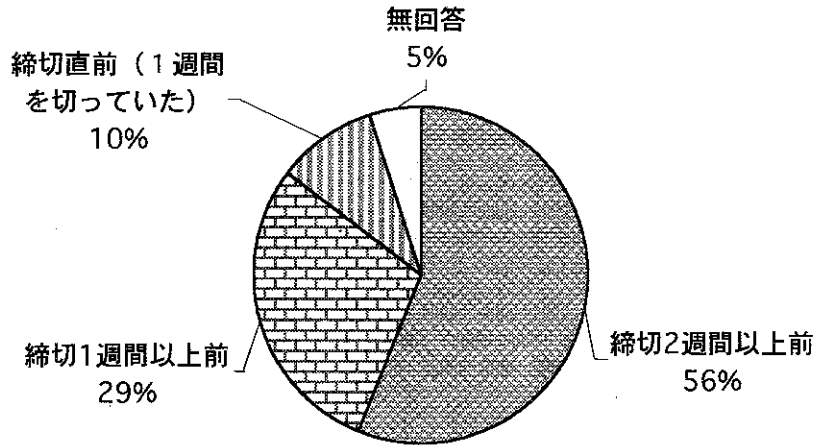
9. プログラム全体・JICAに対してご意見・ご要望があれば裏面にお書き下さい。

平成13年度 開発教育指導者研修 アンケート結果

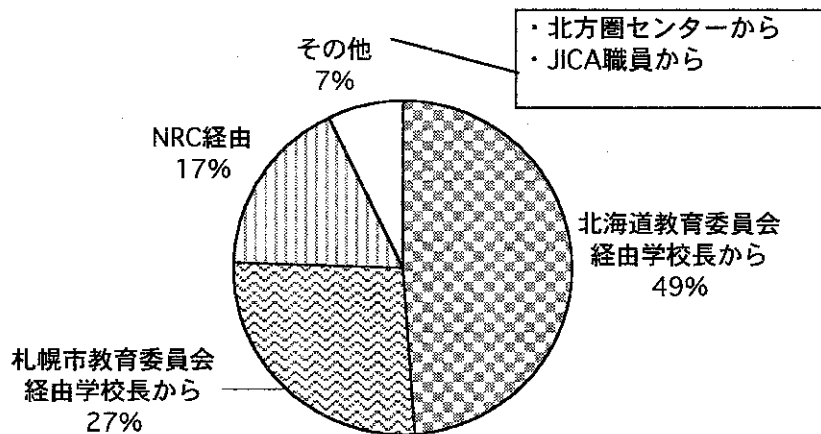
1. 開催時期は？



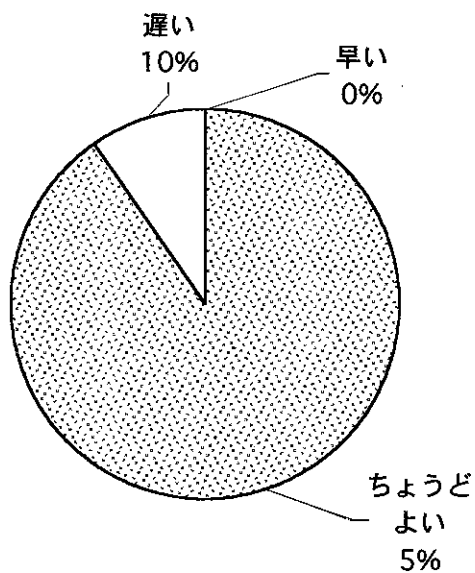
2. 実施要項が手元に届いた時期について



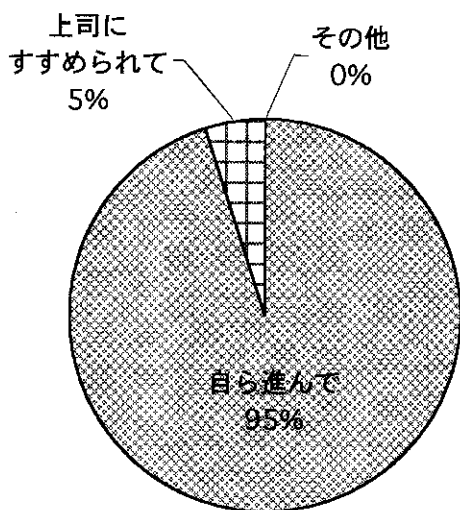
3. 実施要項はどのように入手されましたか？



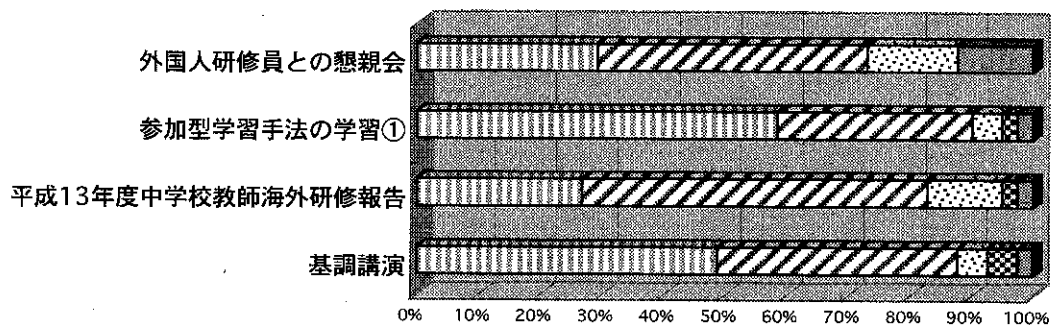
3. 実施要項配布時期について



4. 応募の動機について

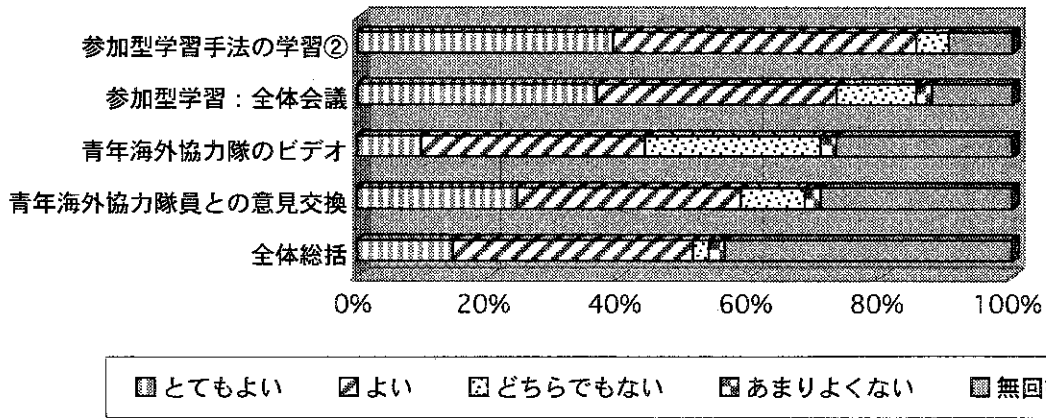


5. 各プログラムの内容について (1日目)



とてもよい
 よい
 どちらでもない
 あまりよくない
 無回答

5. 各プログラムの内容について（2日目）



6. 「貿易ゲーム」に参加しての感想

- ・ゲームとはわかっていながらも、夢中になって、交渉や作業を行うことを通じて途上国が抱える問題や南北の格差等について身近に感じることができた。
- ・富める国と貧しい国の貿易の方法を考えるきっかけになった。道具のない国は国なりにいろいろ知恵をはたらかせお金をかせいでいた。
- ・やはり教育が一番大切だと感じました。色々とアレンジして様々なことに活用できると思いました。模索していきたいです。
- ・とても楽しく参加しました。小学校の総合以外にも図形であれば算数などにも使えそうで実践の参考になりました。
- ・工夫しだいで色々な場面に应用することができるのでとても面白かった。正直、人間性がモロに出てくる。
- ・very good
- ・世界の仕組みを知る機会となりました。
- ・それぞれの国にあわせた条件で課題を解決していくゲームは面白かった。小学校での利用では、少しアレンジしなおしながら活用させてもらいたいと思います。
- ・どうしようもない不公正感を感じた。
- ・指導者研修なので初めから意図・観点等明らかにしておいても良さそうです。その方が、頭で理解していながらも、やはり「アメリカ(日本)は、アメリカ」を演じてしまう人間の弱さが自覚できるのではないかと思います。持てる国の不幸にも気づけるとと思います。
- ・互いに協力しあうことの重要性を体感的に学ぶよい機会であった。
- ・国力の違いによって様々な感情が生まれ、ついつい自分たちのことに一生懸命になっている自分がいました。それは決してきれいなものではなく、いやな自分、汚い自分に気づくものではありませんでしたが、貴重な体験ができました。協力やアイデアによって発展を遂げる国々を見て感心するとともに素敵だと思いました。
- ・内容のパターンを変えて多方面に活用できる。
- ・大変考えさせられたゲームであった。シュミレーションすることの大切さ重要さを感じた。
- ・あまりわからない中でやっていたが、最後までやってわかった。感想交流がとてもよかった。
- ・途上国の立場を体験でき、よかった。
- ・世界の縮図として考えさせられたゲーム
- ・「世界の中の日本」（中学社会）の導入に役立つと思います。豊かな国、日本がどのように他の国々と関係を築いていくべきなのか、世界全体として豊かになっていくために何が必要なのか生徒と一緒に考えて行くためのきっかけになると感じました。
- ・とても楽しかった。ファシリテーターの適切な進め方のお陰だと思う。また、実際の教育現場に置き換えての話し合いがあったのも実りがあった。
- ・社会科（中学校）の授業で、そのまま使えそうです。これだけでも、来た財産になりました。いろいろアレンジを加え、生徒に還元していきたいです。
- ・このゲームと「開発教育」の関連が理解できない。ゲームそのものはまあまあ。
- ・とても様々な体験をさせていただきました。熱中しました。教室で使用する場合は一考を要するかも。

・始めから終わりまで嫌だった。その思いを乗り越えながら最後まで部屋を出ないのが精一杯だった。絶対に使うことはないと思うが、もしやるとしたら「世界はお金で動く」という価値観に支配されている状況を批判的に感じさせるもの、として使うだろう。

・愉快

・とても良い教材に成り得ると感じました。ただ、私は小学校教員なので、子ども達に提示する際は、ルール、内容など、かなり手を加える必要があると思います。教育効果を考え、活用してみたいと思います。

・excellent

・ゲームとはいえ、自分でも思いがけない感情がいろいろと芽生えました。貧しいことを頭で知ると体感するのは、こんなに違うものなんだなあ、と思います。

・大変興味深く楽しく参加できた。

・国それぞれの事情を感じる事ができた。

・いろいろな考える力、段取りや交渉する能力などが試されておもしろかったです。また、3人とかグループでやるのも心強いが難しいとも感じました。

・実際の国家間の貿易のあり方や立場を深く考えることができ、とても参考になりました。

・ゲームの内容をいろいろ工夫すると学校（学級）で活用できると思う。楽しかった。

・Good。学校に帰って更に工夫して使うことができる。

・ゲームでも、その立場になってみると、それぞれに感情も出てきておもしろいものだと思います。実際に資源も技術もない国は本当にどうしていったらいいの。。

・資源や技術のない国の厳しさ、悔しさなどにふれることができた気がした。

・簡単そうで意味深いゲームだった。

・競争的要素が強く、楽しく学ぶのには良いゲームである。授業の導入として用い、そこから発展していけるよう工夫して活用していきたい。

・たいへん面白かったと思います。いろいろな視点から利用できると思います。参加者としてゲームしたのがよかったと思います。

・なかなか難しいゲームでしたが、貴重な経験でした。

6. 「宇宙人がやってきた！」に参加しての感想

・宇宙人の態度がだんだん高圧的、暴力的になっていくことが、ゲームとはいえ怖かった。言葉や価値観が異なってもコミュニケーションの手段を探り、対等な立場で意見交換することの大切さを知ることができた。

・攻める国（宇宙人）は一方的、強制的であり、攻められる国には自由がないことなど、世界進出した国のことや攻められた側の国のことも両面しっかり教えていかなければならないと思った。

・お互いを理解し合う、人と一緒に何かをやりとげる難しさを感じました。価値観（目的）をどこに置くのかを明確にしないと前に進めないことの難しさも。

・自分の行動の見直しもできたように思います。価値観のおし売りよりも共に考え答えを見つけていく大切さ改めて実感しました。

・自分の意見を述べる事が、どれだけ大切か考えさせられた。

・excellent

・「人」とは何かを考える機会となりました。

・宇宙人とのやりとりが次第に変化していくことがとても印象的でした。植民地支配について学習することができました。

・侵略されることに憤りを感じた。

・ゲームを通し、色々な思いを持った。が、最後まで何が目的なのか分からない。それぞれで良いのか。学校現場ではある程度絞った方向性が必要。我々も、どこかの世界ではきっと宇宙人になっているかも。

・植民地の不平等な様子を学ぶことができた。先進諸国が歩み寄り、援助していくことが共栄につながっていくのではないかと思った。

・武力によって一方的に自分たちの土地を取られ、文化を奪われてしまう、何とも言えないもの（怒・無力感）を感じました。今までの歴史をまた違った観点から見れる気がします。ワークショップからいろいろ学ばせ（気づかせ）て頂きました。

・状況のsettingが少々難しい。

・植民地主義、実態を理解するなんて出来ない。ところが、なるほどと納得することができた。

・短時間で宇宙人の人たちがその役になりきり、たいへん勉強になるものにしてくれた。よく考えれば身のまわりにはいろいろあると気づかされた。

・初めて参加させていただきましたが、参加型の学習には「知識」+「人間としての感情」が重要なファクターになっていることが分かりました。近代の歴史、現代の国際関係を授業で行う際に刺激的に導入になると思います。

・ワークショップに慣れていない私にとっては、入り込むのに時間がかかった。あまり効果のある手法ではないと思った。

・学校での実践は生徒の能力が高くないと難しい。自分としてはすごく勉強になりました。

・このゲームと「開発教育」の関連が理解できない。ゲームそのものはまあまあ。

・とても様々な体験をさせていただきました。熱中しました。教室で使用する場合は一考を要するかも。

・ゲーム後の振り返り、歴史学習をも体験してみたかった。有意義かつ有効かもしれない。

・シビア

・とても良い教材に成り得ると感じました。ただ、私は小学校教員なので、子ども達に提示する際は、ルール、内容など、かなり手を加える必要があると思います。教育効果を考え、活用してみたいと思います。

・上手

・これまた複雑な気持ちになりました。「貿易ゲーム」も「宇宙人が来た」も小学生相手にどう生かし実践していくのか考えてみたいと思います。

・小学生には難しいと感じました。

・強者と弱者の立場がわかり弱者の気持ちになれた。

・どんどんやっていくと人間関係が悪くなるかもしれません。

・貿易ゲーム同様シュミレーションを通じて、500年前、新大陸で実際に行われていたであろう行動について考えることができ、参考になった。

・『宇宙人』役をやったが、だんだん嫌な気分になってきた。

・大変考えさせられる発想の問題である。

・宇宙人という役だったが、だんだんなりきってしまうようでした。怖い気がしました。真意を隠しての訪問を歓迎してくれたことが印象に残りました。

・自分を主張出来ない、従うしかないという状況に初めて出会った気がする。障害をもつ方のお話を聞き、現場で自分は抑圧する立場に立ってはいないかと考えさせられた。

・なかなか難しいゲームだった。授業に取り入れたいが準備、ゲームその後の振り返りなどしっかりとしないと違う方向に行きそう。

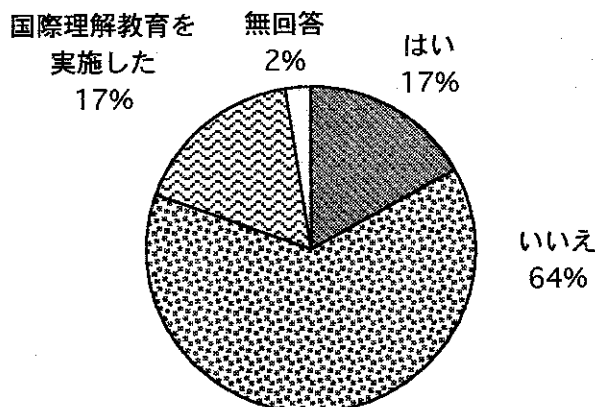
・植民地という概念を自ら体験して学べるのはすばらしいと思う。

・大変面白かったと思います。参加者としてゲームしたのがよかったと思います。

・おもしろいゲームでした。ただ「学習色」を強めないでと後味が悪いかも。他、様々なゲームや本の販売や購入の仕方の紹介をお願いします。

・植民地シュミレーションゲームだが、人間の感情の動きが表現され大変興味深かった。但し、侵略者に対して「戦う」という表現・態度が出なかったのは国民性の現れであろうか。

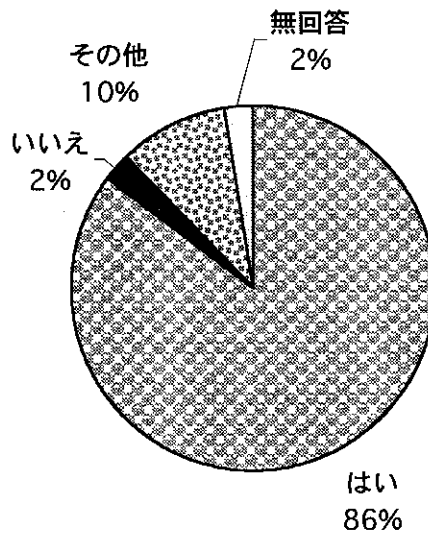
7. 学校の授業、その他の場所で「開発教育」を実施されたことがありますか？



「はい」・「国際理解教育を実施した」の場合、その内容について。

- ・ 途上国の文化等について調べ理解を深める。
- ・ 子ども達の親にアメリカ人の父親が2名ほどおり、英語の学習からアメリカなどの英語圏の文化を知る学習を行った。（3時間実施）
- ・ 「食物はどこから」→今食べている食物がどの国から来ているのか等。JICA研修員との交流。
- ・ 国際プラザにて教員対象に開発教育についての話し合い。
- ・ 友人の小学校教員に依頼されて、ベトナムの話、スライドを見せた。
- ・ 所長さんに来ていただいておりますとお話と協力隊のビデオ鑑賞。
- ・ セミナー
- ・ 異文化と自国文化の理解をめざし、定期的（月2・3回程度）に外国の方との交流授業を行っています。
- ・ 学校の授業の中で、“無人島ゲーム”を実施しその中で人間が生きて行く上で必要不可欠なものとして生誕とその内容についてシェアしながら考えていった。
- ・ 留学生や研修員（外国）の方を学校（学級）に招いて、子供達が調べたことを発表して交流した。
- ・ 食文化・ことば。
- ・ 外国人のお話、ユニセフ講演会

8. 今回の研修の内容を学校、その他の場所で活用してみようと思われましたか。



8. 今回の研修の内容を学校、その他の場所で活用してみようと思った・思わなかった理由。

- ・ 開発教育の大切さを知ることができたので、学校現場でも生かしてみたいと思うので。
- ・ 総合学習の中でやれたらおもしろいだろうし、開発教育でやっている実践の中に教科で実践できそうなものもあり資料が欲しいです。本も購入したいものです。
- ・ 生徒が自ら考える下地やきっかけになると思います。
- ・ 違う立場の者の気持ちを実感させる上で、とても有効なものがありました。子供の発育段階を含めて実践していきたいです。
- ・ 開発教育に限定せず色々な場面でこの研修会で学んだことを活用し自分の幅を広げようと思う。
- ・ 子どもの認識を深める機会(方法)として有効だと思います。
- ・ 貿易ゲームなどは社会の学習にも有効に活用でき、より実施に近い学習がのぞめ、子ども達にも好感がもてるのではないかと感じる。
- ・ 生徒なりの考えを知りたい。持って欲しい。
- ・ 高学年の児童であれば今回の内容をちょっと工夫することにより効果的に学習させることが出来るのではないかと思います。

- ・活用してみたいという思いや興味は強いですが、実際にやるとなるとやらせる側の知識や理解の面で不足が感じられるため実際行うのは難しいかなと感じています。
- ・開発途上国の問題等を地域社会に伝えていく手法のひとつ。
- ・授業実践までいなくても、課題提供したい。総合的な学習の時間の中で活用できればと思っている。
- ・NGOの会員に対する研修として活用してみたい。
- ・ゲーム形式「気づく」内容、新指導要領の社会科（地理・公民）の実践に即戦力になるものばかりでした
- ・フオトランゲージ手法を活用してみたい。
- ・今回は自分が納得できるワークショップ（心に届くもの）が残念ながらなかったが、自らのこれからの創意工夫もあわせて、これというものを模索していきたい。
- ・総合的学習をしっかりとものにしたい。
- ・とても興味深い内容でした。小学生用にアレンジしてみようと思います。
- ・国際的な課題を子ども達にも伝えたい。
- ・シュミレーションを体験することによって見方、考え方が変わってきました。子ども達にどの程度できるかわかりませんが、活用させていただきたいと思います。
- ・子供が興味を持って参加すると思います。
- ・今日、私が参加して感じたことを同じように生徒にも考えてもらいたいと思ったため。
- ・『貿易ゲーム』は学級でやってみよう。
- ・研究部長として、学校の先生達にまず、資料提供等していきたい。
- ・参加型学習は、ゲームとはいえ現実に行ったことを考えさせるために似たような立場に立ってみることの出来る有効な手だてだったと思いました。紹介されていた本も読んでみたいと思います。
- ・どちらのゲームも小学生に導入するのはもう少し手直しをする必要があると思うので、できるならやってみようがもう少し時間がかかると思う。
- ・生徒の理解度をさらに求めたいので。
- ・わかりやすくプログラム化されており授業で活用しやすいように工夫されたワークショップなど教育現場の実際に即した内容だった。
- ・これから検討します。
- ・「総合」でも「教科」でも大切なことだと思うから。

9. プログラム全体・JICAに対してのご意見・ご要望。

- ・大変、有意義な学習を経験することができました。ありがとうございました。
- ・とてもよい企画だと思います。人間としてグローバルな視野に立って今自分の出来ることから協力していけたらと思います。海外協力隊のことも少し知ることが出来ました。
- ・大変濃い内容で勉強になりました。ありがとうございます。欲を言わせて頂ければ、全て、時間が足りなく感じましたので、この内容で、2泊3日で、ゆっくりと学ばせて頂ければ、と思いました。また、次の機会を楽しみにしています。
- ・個人的にとっても楽しく参加させて頂きました。現在小学校で来年度完全実施される新指に向けてカリキュラム作りに取り組んでいます。その時、国際教育で他国や自分の国の文化や伝統、言語について広い知識を子供達にもってもらうことが大切だと思っています。子供達にとって、国際理解は、自分の国との違いをまず体験することだと思っています。外国から来た人たちのふれ合い、話し合いがとても良い機会のように思っています。できれば、小学校などに留学生などを派遣する制度などがあれば利用させていただきたいです。もし小学校と外国から来ていただいている人たちとの交流の機会があれば連絡下さい。2日間ありがとうございました。
- ・開発教育という言葉を書くこと自体初めてでどのようなものか想像がついてなかったのだが、1泊2日、充実した研修でした。これからも、このような研修をどんどんやって欲しいと思う。残念だったのは、ワークショップでふり返りの時間が短かったので時間がとれればと思った。また、協力隊に興味があるので、その面の話しも聞けて非常に良かった。（欲を言うともう少し時間があるともっといろいろな話が聞けたと思う。）来年度、同じ様な研修会を持つのであれば、また参加をしたいと思う。（できれば発展したようなものが良い。）
- ・初回とのことですが、これを終えた人が理解を深めるためのnext step program が欲しい。
- ・大変良い研修会でした。準備は大変だったと思います。またの機会がありましたら参加したいと思います。
- ・これからも実施してほしいと思います。
- ・今後も続けて頂きたい。

- ・教育の新しい方向性にヒントになったと感じている。町に戻って新しく取り組んでみたい。ぜひ毎年続けて欲しい。
- ・様々な感情・思いをもつことができました。ありがとうございました。
- ・来年も是非実施して頂きたい。その際、なるべく新しい参加者を対象とする事を希望します。
- ・JICAという組織をよく知らなかったが、身近にこのような施設があり驚いた。私のまわりには外国の方はあまりいないが、周りの人々を理解するという意味で開発教育をより深く学習したい。ありがとうございました。
- ・協力隊員との意見交換の時間がもっと欲しかった。子ども達の教育支援NGOとして先生方と外国の教育についての意見交換をしたかった。
- ・今回、盛りだくさんで貴重な体験をさせていただきました。学校に持ち帰り、授業や総合学習にもぜひ取り入れていきたいと思えます。また機会がいありましたらぜひ参加させていただきたいと思えます。
- ・協力隊員との意見交換の時間がもう少し長くても良かったと思う。もっと教育観、教育のやり方etcの違いを知り話し合いたかった。
- ・基調講演を充実して、もう少し掘り下げた内容にしてほしい。事例の紹介も良いのでは。
- ・中学校教師の短期研修は英語科・社会科に限らずもっと広い募集にしてほしいです。総合学習で担当するのは全教科の教師だから。
- ・いろいろな方に会えてよかった。ただ全体を通してお話を「拝聴」することが多く、本質的な討論をする機会が欲しかった。でも参加してよかったです。ありがとう。
- ・せっかくいくつかのプログラム（参加型学習）を体験した、させていただいたので、ぜひ活用したいと思えます。できれば、プログラムのルール等（日本版、海外版に限らず）が載っている本の紹介（参考資料）をしたプリントが欲しいです。
- ・大変楽しい2日間でした。ありがとうございます。今後共よろしく願います。
- ・小学校の教員対象の海外派遣がなぜないのですか？
- ・毎日の学校生活の中でなかなか外に目を向ける機会がありません。この研修会に参加したことによって発想の展開に常にこころがけていかなければ、という気持ちを持たせていただきました。ありがとうございました。
- ・このような研修の機会を増やしていただけたらと思えます。
- ・今回の研修を開催してくれたことに感謝すると共に、今後も機会がありましたらぜひ参加させていただきたいと思えますので、よろしく願いいたします。
- ・青年海外協力隊に休職扱いで行くことの出来る教員の人数を増やしていただきたいと願っています。今回のプログラムは、今後に役立つ素晴らしいものでした。ありがとうございました。
- ・これを機に、公立学校との連携をもっと深めて欲しいです。
- ・第1期生として参加させて頂き良かったです。また、こうした企画を提供して下さい。
- ・ゲームはとても良かったと思えます。次回以降もいろいろなゲームを紹介していただけるとよいと思えます。
- ・もっと小学校教員、小学生に一石投じることができる提言・内容を積極的に揭示・提示していただけたらと思えます。今回、僕自身そうでしたが「わからないことがわからない」状態なので、でも今回はとても貴重な経験ができました。ありがとうございました。
- ・研修コース、JOCV、専門家OB等を活用しての「開発教育」に対する明確な路線を提示し、研修員コーディネーターにも指導してほしい。

IV 開発教育指導者研修実行委員会議事録

※本報告書に示されている様々な見解・提言等は、各組織の意見を代表するものではないことをお断りします。

第一回開発教育指導者研修実行委員会議事録

日時：平成13年7月2日（月）午後3時～4時30分

場所：JICA 北海道国際センター（札幌） 第二会議室

出席者：

北海道教育庁 生涯学習部生涯学習振興課	後藤主査
北海道立教育研究所 教育開発部	小澤研究研修主事
札幌市教育委員会 学校教育部指導室	奥山指導主事
(社) 北方圏センター 国際協力部	下斗米部長
(社) 北方圏センター 札幌国際センター	長谷川事務長
(財) 札幌国際プラザ 市民交流部市民交流課	後藤課長
JICA 北海道国際センター（札幌）	総務課 千坂課長
	総務課 濱川課長代理
	業務課 高橋課長代理
	総務課 和田職員

会議概要：

配布資料（略）

- ①「開発教育指導者研修」第一回実行委員会 議事次第
- ②開発教育指導者研修検討案
- ③平成13年度開発教育指導者研修～実施要項～（案）
- ④帯広センター 平成13年度開発教育指導者研修実施要項（案）
- ⑤北海道国際センター（札幌） サーモンキャンペーン一覧表

議題1： 開発教育指導者研修実施要領（案）確認

○実施要領（案）（資料③）に従って説明、質疑応答。

JICAより提案の実施要領（案）内容につき、基本的に出席者の同意を得たところ、主な協議内容以下の通り。

- ・要領（案）5-（3）に「各都道府県教育委員会云々」とあるのは「道及び関連市町村教育委員会云々」と読み替えることを確認。また、5-（1）及び（3）の参加希望応募は教育庁及び札幌市教委へ、それ以外はJICA 北海道国際センター（札幌）へ

- ・実施時期については来年の冬休み期間の1月10日(木)～11日(金)ということであるが、これは大津先生の都合を優先し、第一案として検討していきたい。
- ・日程案中来賓挨拶とあるのは、JICA 以外からの関係者(例えば教育長等)を想定していたがこれについては必須ではなく、研修プログラムの時間を多くとる方向でかまわない旨、教育委員会側からコメントあり。(来賓挨拶は懇親会等の場で十分の由)
- ・ファシリテーターとコメンテーターについては大津先生と協議して決めていきたいと考える。具体案としては先生のゼミ関係者他。
- ・教育庁より、二日目の全体会議は少なくしてはよいのではとのコメントが呈された→これについてはプラザより、参加型学習は確かに楽しく、時間を沢山とって行いたいという要望もあるが、むしろ、学習を実践する時間そのものよりも、それが終わったあとで、「気づく」ということを行うことが重要な点から、二日目の全体会議の意義は大きいとのコメントが呈された。
- ・協力隊員の体験談については、効率的な時間配分を考え、初日の参加型学習の後に1.5h程度で入れ、懇親会でも意見交換ができるようにした。
- ・「ゲーム」については2時間かけて、全体で2つのゲームをこなすのか、それとも2グループに分けて別々のゲームを実践するのか、また、全体的な時間配分についても今後大津先生とも相談しつつ詰めていきたい。

○開発指導者研修検討案(資料②)に従って予算的説明

- ・出張旅費については、JICA旅費規程で試算し予算化(40万円)したものであるが、基本的には札幌市内20名、10支庁管内から各1名の10名と、NGOから5名とし、予算の範囲内で10教育局から数名の出席者を指名し、計40名程度で調整を図ることとした。
また日当・宿泊費については実費のみの支給で支障なしとの意見もあり、再度JICAで検討することとした。

○その他

- ・(教育庁・市教委より)「共催」より、むしろ教員募集との関連(組合対応)で「後援」という形式ならば何ら問題はない由。また、従来、長期休暇中の研修については管理職研修のみであり、研修の公募は一般教諭に呼び掛けることはできない。(組合との協定事項)このような事情があるため、「共催」という形で当該研修の主催者側の立場にはなりにくい事情がある由。
- ・公募をJICA主催で行った場合、「定員を超えた場合は抽選で参加者決定する」ほうがよい。
- ・帯広センター管内(4支庁対象)では、3年来実施してきたセミナーを指導者研修とし、十勝国際理解教育研究会と共催で実施する。(資料参照)なお、帯広の窓口は江種代理。
- ・NGOからの参加者については、NRCとプラザで推薦することで同意した。以後の経過については、今後各実行委員に適宜情報提供する。(メールcc等により)また、9～10月頃を目途に中間経過報告を兼ねた第二回委員会を開催

する予定。

議題2： その他連絡事項

(1) JICA 北海道国際センター（帯広）管内（道東）の「開発教育指導者研修」について

・資料④に従って説明

(2) その他の開発教育事業に関する情報交換

- ・サーモンキャンペーンについて（JICA 総務課）：資料⑤に従って第Ⅰ四半期実績及び第Ⅱ四半期移行の計画について現状報告。
- ・研修員学校訪問（JICA 業務課）：第Ⅱ四半期の美瑛町立美馬牛中学校については従前からの依頼により実現したもの。それ以外の研修員派遣可能なコース16コースについては、前回会議でも報告したとおり札幌国際理解教育研究会・北海道国際理解教育研究協議会を通じて調整中。7/19に札幌市内の受入可能校について決定する予定。具体的に学校訪問が行われるのは本年9月以降になる。
- ・JICA 留学生との今後の可能性について（JICA 業務課）：公費留学生（長期）として全国にちらばるJICA 留学生、今後彼らを短期インターン等により各地方センターで受入、専門実務研修に絡めていくことが検討されている。その中で、開発教育支援関連事業との関わりを持つようなプログラムも検討対象となりうる可能性がある。
- ・高校生実体験プログラムについて（JICA 総務課）：8月2～4日で実施予定。道教育庁及び北海道高等学校国際教育研究協議会を通じて参加校計4校の推薦をお願いしているところ。
- ・教師海外研修について（JICA 総務課）：本年度の北海道国際センター（札幌）管轄下の参加予定者が決定したところ。高校（ヴェトナム派遣）は札幌国際情報高等学校椎名教諭、中学（ザンビア派遣）は旭川市立嵐山中学校の上村教諭。7月14日に当センターで事前研修を実施予定。上記教師海外研修の募集要項は本部より全国の全中高校に対して発送しているもの。
- ・積丹町では独自で長期休暇中に年間2-3名の教師を海外派遣させる制度がある由（NRC）。派遣先は独自で計画できる。

第二回開発教育指導者研修実行委員会 議事録

日時：平成13年10月23日（火）午後3時～4時30分

場所：JICA 北海道国際センター（札幌） 第二会議室

出席者：北海道教育庁 生涯学習部生涯学習振興課	後藤主査
北海道立教育研究所 教育開発部	小澤研究研修主事
札幌市教育委員会 学校教育部指導室	奥山指導主事
(社) 北方圏センター 国際協力部	下斗米部長
(社) 北方圏センター 札幌国際センター	長谷川事務長
(財) 札幌国際プラザ 市民交流部市民交流課	後藤課長
JICA 北海道国際センター（札幌） 総務課	千坂課長
	業務課 室澤課長
	総務課 濱川課長代理
	総務課 和田参事
	総務課 上森

会議概要：

配布資料（略）

- ①「開発教育指導者研修」第一回実行委員会 議事録
- ②平成13年度開発教育指導者研修～実施要項～（最新案）
- ③北海道教育庁、札幌市教育委員会及び（財）札幌国際プラザ宛依頼文書（案）
- ④タイムスケジュール
- ⑤北海道国際センター（札幌）サーモンキャンペーン一覧表（第2四半期～）
- ⑥道立教育研究所国際理解教育研修講座受入プログラム（案）
- ⑦北海道国際センター 業務概要（平成12年度版）

議題1： 現状確認・経過報告（別紙①）

○第一回開発教育指導者研修実行委員会議事録」確認

議題2： プログラム内容確認（別紙②中 別添1）

○コメンテーターとファシリテーターの人选が決定した旨を報告。プログラム内容については本日17:00よりコメンテーター、ファシリテーターを招いての打ち合わせにてプログラム内容を検討。人数増も対応可能かといった点も含めて確認する。

議題3： 募集方法確認（別紙②及び③）

○実施要項（案）（資料②）に従って説明、質疑応答。

第一回実行委員会にて討議された内容を元に作成された実施要項（最新案）について、出席者の基本的同意を得たところ、主な協議内容以下のとおり。

- ・参加人数は45名以上の応募が予想されると共に、道の研修促進の予算の活用も検討可能なところ、定員増が可能かどうか、参加型プログラムを担当するコメンテーター、ファシリテーターとも協議の上参加人数を決定する。
- ・NGO関係者はNRCからNGOネットワークを中心に募集をかける。最大10名程度を推薦したい(NRC)。
- ・交通費のJICA負担に関しては札幌市内教員は自己負担、札幌市外のHICS管内教職員は勤務地からJR札幌駅までの旅費とセンター宿泊費を支給。NGO関係者は、基本的に札幌市内からの参加が想定されるので、市内教職員同様自己負担。他方、人数の振り分けに関しては予算の範囲で別途検討する。
- ・「5 参加対象者」にある「学校長から研修参加許可(職専免)が得られる者であること」という記述は「学校長から出張命令が得られる者であること」に読み替えることとするが、この記述に関しては教育委員会にて再検討する。通常移動中の事故に関しては主催者側に責任はない。校長印がもらえれば公務出張とみなすことができるものと思われる。
- ・「6 応募方法」は教職員に関しては道教育庁又は札幌市教育委員会経由で募集通報する。教職員の応募に関してはJICAで取りまとめ、応募者多数の場合の選考方法についてはJICAに一任。NGO関係者に関してはNRCにて募集、参加者選考を行う。
- ・参加申込書に「国際理解教育・開発教育関連の研修への参加経験有無」を記述する一項を設け選考の基準とする。「所属長記入欄」より「職専免」を削除。また、道予算による参加の可能性もあるのでJICA負担とならなくても参加の意志があるかどうかを確認する。

○その他

- ・要項表紙にある「北海道教育庁」は「北海道教育委員会」とする。
- ・教育委員会が研修費を支出する場合、日当も支出されるため、JICA負担の参加者との金額格差が生じる。
- ・公文書は、各教育委員会には募集依頼と後援依頼を发出。NRCには後援依頼と募集依頼を一枚にまとめた文書、プラザには後援依頼をのみを发出する。
- ・募集方法に関しては、教育委員会にて再度検討の上、問題がなければ11月1日公文書を発送する。

議題4： 研修実施までのタイムスケジュール確認(別紙④参照)

○タイムスケジュールに関しては別紙④の内容にて合意。なお、11月20日(火)15:00より第三回の実行委員会を実施する。また、可能であれば高橋コメンテーターと小泉、都築両ファシリテーターと合同の会議とする。

議題5： その他連絡事項(別紙⑤～⑦)

○その他連絡事項については別紙のとおり。

「平成13年度開発教育指導者研修」講師打ち合わせ記録

日 時： 平成13年10月23日（火）午後5時～6時30分

場 所： JICA 北海道国際センター（札幌） 第三会議室

出席者：	酪農学園大学助教授	高橋 一
	開発教育ワークショップ研究会	小泉 雅弘
		都築 仁美
	JICA 北海道国際センター（札幌）	総務課課長 千坂平通
		総務課課長代理 濱川格
		総務課参事 和田裕司
		総務課 上森奈穂美

協議概要：

本件研修に関し、基調講演者である道教大・大津教授から推薦頂いた、参加型プログラム・コメンテーターの高橋氏及びファシリテーターの小泉・都築両氏らに対し、本件研修実施に到った経緯、現状を説明すると共に、プログラム内容検討の初会合を行ったところ、概要以下の通り。

1.研修目的及び準備状況の確認

- (1) 本件研修は、来 2002 年度以降小・中・高校を対象に実施が予定される総合学習の導入を背景に、「JICA の有する国際協力の知見を生かして開発教育の担い手育成を支援する」と共に、「市民の途上国に対する関心・理解を促進する」ことを目的に、全国の JICA 機関（17カ所）において実施するべく本13年度より予算化された事業である。
- (2) JICA として本件開発教育支援事業への取り組みは新しく、今回の実施にあたっては、オール JICA としての統一的な実施要項はない。このため実施については各地域の教育委員会や国際交流団体と実行委員会を形成して対応することとしており、当センターでは道及び札幌市教育委員会、道教育研究所、（社）北方圏センター（NRC）、（財）札幌国際プラザの担当責任者を委員として、本件研修の実施要項を検討してきた。一方企画及び研修内容については、今般の人選を含め、当地における開発教育の第一人者の一人である道教大の大津教授に助言頂いている。
（上述の通り各機関によって取り組みに差があり、筑波センターでは週1回ペースの講座も行っている。）
- (3) 参加者は、教員を中心に開発教育初心者を対象とする。一方北海道は、他都府県に比し開発教育の展開実績は少ないと言われているが、研修を実施する要員についてもできる限り地元のリソースを活用し、研修参加者のみならず実施体制の強化支援も行っていきたい。
- (4) サーモンキャンペーン、学校訪問等 J I C A 実施の開発教育関連の事業を併せ

紹介した。

2.プログラムについて

- ・プログラム内容について下記の意見交換を行い、10月中にファシリテーターから大津先生にも確認しつつ、上記 JICA の研修目的に沿った具体的なワークショップの内容を検討してもらうこととし、可能であれば11月初旬に発送する応募要項に盛り込むこととした。
- ・開発教育セミナーには、ワークショップを体験するタイプのもとのカリキュラム作成を狙ったものが考えられるが、初心者向けということであれば、ワークショップを体験してもらいおもしろいと感じてもらうことが大事。
- ・貿易ゲーム以外にもよいものがないか検討する。定員が増えるのであれば30名のグループを2つ作る方向でワークショップを考える。
- ・知識のつめこみにならず、問題意識を喚起させるようなものが望ましい。
- ・手法を学ぶことも大切であるが、なぜ参加型なのかを知る必要もある。
- ・1日目はワークショップ中心で実施する。内容はアイスブレイキング→ワークショップ→振り返りで2時間必要。ワークショップ終了後は授業での実践を考え、意見交換ではなく中学教師海外研修でザンビアに行った上村教諭に具体例として報告を依頼するのが効果的と思われる。
- ・2日目のまとめも参加型で行ってはどうか（1日目の感想等）。他の先生達と情報を共有すると同時に、あらたな手法を学ぶ場とすることができる。また、授業に役立つアイデアのディスカッションなどもできるとよいのではないか。

3.第3回実行委員会

次回の委員会（11月20日）は各委員に加え、コメンテーター及び両ファシリテーターも参加し合同で実施する。

以上

第三回開発教育指導者研修実行委員会 議事録

日時：平成13年11月20日（火）午後3時～4時30分

場所：JICA 北海道国際センター（札幌） 第一会議室

出席者：

北海道教育庁 生涯学習部生涯学習振興課	後藤主査
札幌市教育委員会 学校教育指導室	奥山指導主事
(社) 北方圏センター 国際協力部	下斗米部長
(社) 北方圏センター 札幌国際センター	長谷川事務長
(財) 札幌国際プラザ 市民交流部市民交流課	後藤課長
(欠席：北海道立教育研究所 教育開発部	小澤研究研修主事)

オブザーバー参加：

コメンテーター 高橋 一 (酪農学園大学助教授)
ファシリテーター 小泉 雅弘 (開発教育ワークショップ研究会)
ファシリテーター 都築 仁美 (開発教育ワークショップ研究会)

JICA 北海道国際センター（札幌）	総務課 千坂課長
	業務課 室澤課長
	総務課 濱川課長代理
	業務課 高橋課長代理
	総務課 和田参事
	総務課 上森

会議概要：

配布資料（略）

- ①平成13年度開発教育指導者研修日程表（11/20版）
- ②タイムスケジュール
- ③応募状況（NRC）
- ④参加型学習に関する資料
- ⑤サーモンキャンペーン 講師派遣一覧表（平成13年度第三四半期）

議題1： 現状確認・経過報告（別紙①・②）

- (1)「第二回開発教育指導者研修実行委員会議事録」「講師との打合せ議事録」確認
- (2)スケジュールに関しては、懇親会会場設営関係上、上村教諭の「中学校教師海外研修報告」を1日目午後最初のプログラムに変更としたい。2日目午後の「協力隊員の活動報告」については、人数に応じて3～4つのグループに分ける等検討中。
- (3)大津先生の演題については、12/5に濱川・コメンテーター・ファシリテーターで打合せを行って最終確認予定。
- (4)札幌市の教員については、最終的には校長の判断となるが外勤扱いで参加となる

見込み。

議題 2 : 応募状況報告 (別紙③)

- (1)NRCより11月19日現在での参加者名簿有り。北海道教育庁より要項は各教育局へ発送済み。来週あたりから申込が来るのではないか。札幌市教育委員会については21日に各学校に要項が届く予定。道教育庁から各教育局及び市教委から市内各学校宛文書の写しをJICAにも参考として情報提供予定。

議題 3 : 参加型学習について (別紙④)

- (1)コメンテーター・ファシリテーターを含めた協議の結果、「参加型学習手法の学習」、「参加型学習のまとめ」の部分に関してはスケジュール案の通り実施することを確認した。
- (2)ファシリテーターである「開発教育ワークショップ研究会」の小泉氏、都築氏より、当日実施するワークショップに関する説明が行われた。「貿易ゲーム」は開発教育では最もポピュラーな手法であり、初心者に対しても効果がある。一方、「宇宙人がやってきた!」はカナダで開発されたワークショップで地球外生物、ティフ星人による地球侵略のシミュレーション。途上国への関心促進とのテーマにズレはないかとの疑義については、途上国と先進国の関係を考えるきっかけになるとのこと。また、参加型学習を既に体験している委員からは、参加型学習は、与えられたテーマについてモデル(正解)を提示することが目的ではなく、参加者が共に考え、自ら「気づく」行動パターンの習得を目的としたショック療法的な学習法でゲームの種類にこだわる必要はない旨指摘があった。
- (3)ワークショップの体験と共に、その後のフォローが重要であり、本研修の最後に開発教育関係者や機関を網羅したリソースリストを配布するべく、各団体から既存資料を提供することとした。また、この研修で出てきた意見等を教育現場へフィードバックするべく、報告書を作成する。
- (4)2日目のまとめでは、各グループ毎に進行、記録、発表役を決めてグループ内討論を1時間半強行い、その後会場をブリーフィングルームに移して1時間弱の全体会議で各グループの報告を行うこととする。
- (5)ワークショップ時に必要な物品はあまりないが、JICAで用意するので、ファシリテーターに確認の上連絡をもらうこととした。
- (6)本研修により、学校現場でのニーズを的確に把握すること、開発教育関係者のネットワーク作り、NGOの横の連携強化、地域における開発教育のコアをつくる(JICAの人材は異動するので北海道密着のメンバーをつくる)ことが望まれている。そして、将来的には教材開発とかカリキュラム策定とかも検討課題となる。
- (7)NRC及びプラザより、本件研修事務局に必要な要員等協力の申し出があった。

議題 4 : その他連絡事項 (別紙⑤)

- (1)JICAよりサーモンキャンペーン実施及び予定状況の説明。

以上

第四回開発教育指導者研修実行委員会 議事録

日時：平成14年2月13日（水）午後4時～5時30分

場所：JICA 北海道国際センター（札幌） 第二会議室

出席者：

北海道教育庁 生涯学習部生涯学習振興課	後藤主査
北海道立教育研究所 教育開発部	小澤研究研修主事
札幌市教育委員会 学校教育部指導室	奥山指導主事
（社）北方圏センター 国際協力部	新矢部長代理
（社）北方圏センター 札幌国際センター	長谷川事務長
（財）札幌国際プラザ 市民交流部市民交流課	後藤課長
（財）日本国際協力センター北海道支所	山野支所長

JICA 北海道国際センター（札幌）	小森所長
	総務課 千坂課長
	業務課 室澤課長
	総務課 濱川課長代理
	業務課 高橋課長代理
	総務課 和田参事
	総務課 上森

会議概要：

配布資料（略）

- ①第四回実行委員会次第
- ②平成13年度開発教育指導者研修 記録
- ③北海道教育大学 大津教授 基調講演 記録

議題1： 主催謝辞

（小森所長）

実行委員をはじめとする関係者の皆様に多大な協力を頂き、また JICA 内部でも横の繋がりを活用しつつ、最初の開発教育指導者研修は大変な好評を得たことを感謝致します。今回初めての実施により、開発教育支援に対する、ある公的な枠組みができたのではないかと。この意味合いは大きく、次回はこの枠組みを如何に活用して現場ニーズに合わせるか、最大限の効果を引き出していくかが課題になると思うので今後とも協力方よろしくお願い致します。

（千坂課長）

年度当初、開発教育の担い手育成研修を実施せよとの JICA 本部からの指示があり、

この分野に関連する地域の人脈について札幌国際プラザ後藤課長から教育委員会関係者の方々や北海道教育大学大津先生を紹介いただいた。

また、開発教育支援への取組として、1999年3月当事業団作成の『国民参加型協力推進基礎調査「開発教育支援のあり方」調査研究報告書』を取りまとめられた大津先生の助言を頂く機会もあり恵まれた状況にあった。

研修を実施し、大津先生からの指摘があったように「第一段階としては地域の裾野を広げる」という課題については、道教委、市教委等からご後援を頂きNGOと教員の方々が一同に会した研修会が実施でき成功したと自負している。

大津先生著書「一本のバナナから」（1994年出版）当時において、1本のバナナを通じその向こうにあるものを見抜き、ひいては世界経済・流通の現状を認識するところから開発途上国の理解を深めるという手法であったが、現在は参加して考えていくという手法になりつつある。

（財）国際協力推進協会（APIC）が最近出版した「開発教育・国際理解教育ハンドブック」は評判が高く、ここでは、開発教育は生きる力を養う・国際社会の中で自己責任を持って如何に逞しく生きるかを気づくための学習である、と位置づけられるようになってきている。

研修参加者に対するアンケートについては追って詳細結果をお伝えしますが、8割以上の方々に満足頂いている。

また、第一期開発教育指導者研修参加者のネットワーク作りについても進んでおり、近々発起人会合が予定されており、今後の発展が期待される。

議題2：メンバー確認

今回からJICE北海道支所山野支所長を実行委員会メンバーとして迎えることで了解を得た。

議題3：研修会総括

- ・別途配布資料を基に概要報告を行った。

以下、各委員からのコメント、意見交換。

- ・今回行政・教員・NGOが一同に介して本研修を実施した意義は大きい。各職種間の交流を図り様々な視点から考察していくことが効果的。従来の国際理解教育研修では教師が現場で行った実践報告が中心であり、今回のような参加型の研修は目新しく、加えてNGOの方々との交流も行えたことは教師側に学ぶ点が多かった。
- ・今後も初心者ターゲットとした開発教育指導者研修を行い、裾野拡大を図っていく方針を確認した。
- ・今後も参加型学習手法の習得は大切であることから、プログラムから外さずに継続する。

- ・参加型学習の後に行う、気づきのための時間はもう少し多めに設定するのが望ましい。
- ・今後、帯広センターが実施する開発教育指導者研修内容と統一可能なものについて調整を図る。（今年度札幌センターは市外からの教師参加者分について旅費を負担したが、帯広センターは参加者負担としていた等の差異があった。）
- ・一方、ファシリテーターの育成も課題であるとの認識があるので、それについても育成をどこに託していくか等について、折に触れて実行委員会で議題としていきたい。
- ・これに関連して、道教育庁からNGOに対する助成金の可能性もあることから、当該情報については適宜関心のありそうなNGOに対してJICAから情報提供していく。
- ・次年度の開催時期、期間については今年度を踏襲。
- ・教員の参加に係る外勤扱いについても今年度を踏襲することを基本方針とするが、実施要項中の参加条件として掲げるのではなく、研修プログラムの内容により学校側が判断するという趣旨であることを確認した。
- ・次年度の研修実施に際しては、学校訪問プログラム等で協力関係にある、札幌国際理解教育研究会・北海道国際理解教育研究協議会からの意見を踏まえていくことも今後検討。
- ・今回の第一回開発教育指導者研修参加者により自主的に組織されつつある一期生の集まりに対し、今後可能な限り協力しつつ、その活動を注視してゆく。

議題4： その他

- ・次回（平成14年度第1回・通算第5回）開発教育指導者研修実行委員会開催時期については4月末頃を目途に行うこととした。
- ・参考情報として2002年中学生・高校生エッセイコンテストの結果概要報告。
- ・また次回からエッセイコンテスト同様、中学・高校教師海外派遣研修について各教育委員会から後援名義取付を行うこととなった点を連絡（公文書にておって依頼文書発出する。）

以上

〈別 添〉

開発教育指導者研修実行委員会メンバーリスト

(敬称略)

北海道教育庁 生涯学習部生涯学習振興課 主査	後藤 規之
北海道立教育研究所 教育開発部 研究研修主事	小澤 一記
札幌市教育委員会 学校教育部指導室 指導主事	奥山 直毅
(社) 北方圏センター 国際協力部 部長	下斗米 哲明
(社) 北方圏センター 札幌国際センター 事務長	長谷川 美代子
(財) 札幌国際プラザ 市民交流部市民交流課 課長	後藤 道
(財) 日本国際協力センター 北海道支所 支所長	山野 幸子
JICA 北海道国際センター (札幌) 総務課 課長	千坂 平通
業務課 課長	室沢 智史
総務課 課長代理	濱川 格
業務課 課長代理	高橋 直樹
総務課 参事	和田 裕司

(平成14年3月現在)

JICA